

最終章
葬ラレタ秘密【八雲／明治エンド】

見上げれば、夜空には赤い満月。

妖しいその光が、闇夜の中に佇む鹿鳴館をぼんやりと浮き上がらせている。豪奢な門の前に立つ私を、バススルドレスに身を包んだ淑女たちが追い越していく。

（……やっぱり、ドレスじゃなきゃ駄目だよね）

ちゃんとしたドレスだって持ってるのに、なんで制服なんか着て来ちゃったんだろう。思いきり浮いているのは百も承知だけど、いまさら着替えに帰るわけにもいかなくて。

（だって私は、チャーリーさんに会いに日比谷公園に行かなきゃいけないんだもの）

でも今夜開かれる鹿鳴館のパーティーには、八雲さんがいる。

（少しだけ。ほんの少しだけ……）

自分にそう言い聞かせながら、私は鹿鳴館のダンスホールを目指して庭園を歩いて行く。

つかの間だけ、最後に夢を見るために。

「おい、今夜はマジックショーがあるらしいぞ」

「ほう、松旭斎天一か。最近よく聞く奇術師だな」

ダンスホールに入ると、一気に喧噪に包まれた。人に酔いそうになりながらふらふらと歩いていると、

「やあ、芽衣ちゃん」

「っ！」

背後から私の肩を叩いたのは、チャーリーさんだった。

「はは、驚かせてしまったようで悪かったね」

「ほ、ほんとにびっくりした」

まさか、こんなところで会えると思わなかった。てっきりチャーリーさんは日比谷公園にいたかと思っていたから。

「で、誰を探していたのかな？」

「え？」

「僕は君と、満月の夜に日比谷公園で待ち合わせしていたはずだ。でもおかしいことに君は今、僕との約束とは違う場所にいるようだからね」

（あ……）

「もしかしたら君は、誰か別の人と約束でもしていたのかな？　と思ったんだよ」
（違う、そうじゃないの。チャーリーさん）

でもなにを言っても言いわけのようになってしまいう気がして、私は押し黙った。

「その人は、君にとって大事な人なのかな？」

なおも彼は、その話題で食い下がってくる。

「さあ、よく考えて。これは大切な質問だよ？　君にとってその人は、現代での生活より

も大切なものなのかな？」

「それは……。よくわからない」

実はまだ迷ってる。

現代に帰らなきゃ……と思いつつも、この時代に心残りがあるのもたしかだ。

「……へえ？　あんなに帰りたいと言っていたのに？」

そう、私はつい最近まで、自分が現代に帰ることを選ぶと信じて疑わなかった。

（でも、どうして……。帰らなきゃいけないと思うんだろ？）

家族や友達が待っているから？

生まれ育った世界だから？

すべてを捨てるのは無責任だから――？

（じゃあ、私を好きになってくれたあの人を置いて帰ることも、無責任なんじゃないの？）
私がいなくなったら、あの人はどう思うんだろう。

私がいらないこの世界で、私のことを探し回ったりするのかもしれない。
まさか私が違う時代に帰ったとは思わないだろうから。

（――そんなことさせたくない）

私を必要としてくれるなら、そばにいたい。

「誰か、大切な人ができた？」

私はうなづいた。まぶたの裏が熱くなる。

「その人と離れたくないんだね」

もう1度、うなづいた。

たったそれだけの理由で私はここから動けずにいる。私がもう少し大人なら、
きつとこんな気持ちに振り回されたりしないのかもしれない。

「それなら、離れなければいいよ」

チャーリーさんは難なく答えた。

「離れたくなければ、離れなければいい。おそらくその人も君と同じことを思っている
はずだ」

「……そんなのわからない。簡単に言わないで」

「いいや、簡単な話さ」

「どんなに大がかりなマジックでも、タネあかしをしまえば仕掛けなんて拍子抜けするほど簡単なものなんだよ」

「……？」

説得力があるような、ないような。よくわからないとえだった。

「信じられない？　じゃあ、これからすごいマジックを見せてあげよう」

「え？」

「芽衣ちゃんだけの特別サービスだ。今から、ここに君の大切な人が現れるからね」

「なに言ってるの」

そんなはずない。

現れるわけがない。

「心配しなくても大丈夫だよ。明治だろうが現代だろうが、どこにいたって彼は君のこ
とを大切にしてくれるはずだから」

「チャーリーさんっ」

だんだんと喧噪が遠のいていく。人々の笑い声も、風が木々を揺らす音も。

——赤い月だけが、暗闇を照らし出す。

（チャーリーさん）

私は何度も呼びかけた。

（教えて。あなたは誰なの？）

その問いに答える代わりに、彼はニヤリと道化師のような笑顔を浮かべた。

「幸せになるんだよ、芽衣ちゃん」

ぱちんと、大きく指を鳴らした。

*

「……というように、古今和歌集にも月を詠んだ歌がいくつかありまして」

木々のざわめきとともに、生暖かい風が舞い上がる。

風に煽られるようにして、私は顔を上げた。

（あれ……？）

夜空に浮かぶのは、色あせた朱色の月。

いびつなかたちの月が、じっと世界を見下ろしている。

「……月を見上げるたびにもの悲しい気分になるのは、古来の習性なのでしょうねえ。だとしたら、抗う術などあるはずもないと思いませんか？」

答えを求められ、私は隣りに立つ人を見上げた。

「八雲さん……」

「はい」

眼鏡の奥の目が細くなる。

（……チャリーさんは、どこ？）

今さっきまで、チャリーさんと鹿鳴館のダンスホールにいた私。けれど気づいたら鹿鳴館の庭で、こうして八雲さんと夜空を見上げている。

……現代に帰るために、満月の夜を迎えた私。

でも、直前で迷った。どうしてもこの時代を振り切ることができなかった。

（だからなの？ チャリーさん）

私はいつ、タイミングを見誤ってしまったんだろう。

いつ、満月の夜は通り過ぎてしまったんだろう――？

「ふふ、さすがに疲れてしまったのでは？」

「え？」

「さっきまでダンスホールではしゃいでいたでしょう。疲れてしまったのではないかと、心配していたのですよ」

「……私ですか？」

「ええ」

よくわからないけど、私は今の今まで、八雲さんと鹿鳴館のダンスパーティーを楽しんでいたようだ。

（じゃあ、チャーリーさんはどこに行ってしまったの？）

誰も答えてくれる人はいない。

いない代わりに、八雲さんが私の左手を取った。

「貴女に楽しんでいただけたなら、私としても嬉しい限りです。ではそろそろ帰りましょうか？」

「……………」

私は頷き、八雲さんと歩き出した。

鹿鳴館と帝國ホテルは、目と鼻の先の距離にある。

ホテルの門を抜けると、アプローチに見慣れた人のシルエットがあった。

「藤田サン！ 今夜も見回りご苦労さまです」

「……………」

「おやおや陰しいお顔ですねえ。どうされたんです？ 不審な物の怪でも見かけましたか？」

「不審な物の怪は見かけないが、不審な外国人と不審な女なら目の前にいる」
ばっさりと言われた。しかし八雲さんはめげない。

「ふふっ、聞きましたか芽衣サン？ 私たち、どうやら不審な者同士らしいですよ！ いやあ、おそろいなんて嬉しいですね。まあ昔から似たもの夫婦なんて言葉もあるくらいですし」

（すごいポジティブだ……）

嫌みを言われたどころか、むしろ褒められたぐらいに思っているのかもしれない。

「おい、娘」

「はいっ？」

「おまえの趣味などどうでもいいが、行きがかり上聞いておく。本当にその男でいいのか」

すごく大真面目な顔で聞かれました。

「……その男の保護を離れる気があるのなら、妖邏課がおまえを引き受けんこともないぞ」

「え……？」

藤田さんが珍しく冗談を言った、と思った。

でも、彼は笑っていなかった。

「おまえの力を貸せ。ならば俺が面倒を見てやる」

（藤田さん……）

「――藤田サン？」

八雲さんはにこやかな笑顔で、私と藤田さんの間に割り入ってきた。

「世迷い言で女性をたぶらかすなど、貴方らしくもないですね。それとも貴方は、藤田サンの皮をかぶった物の怪なのでしょうか？」

「……ふん。もとはと言えば、俺が最初にこの娘を保護したのだから」

「ほう？ それは公人としてではなく私人としてですか？ たかだか一介のお巡りサンに彼女の人生など背負えないでしょう？ 私は最初から、彼女をお嫁サンにすると決めた行動ですから！」

「それこそ笑わせる。警官ができることを侮るな」

鼻で笑いながら一蹴し、藤田さんは髪を背に払った。

「例の窃盗事件が一段落ついた今、当分貴様らの顔を見ることもないだろう。……だが娘、気が変わったらいいつでも警視庁に來い」

そう言い残し、藤田さんは警視庁の方向へと歩いて行く。かちやかちやとサーベルの揺れる音が、闇夜の中へと吸い込まれていった。

＊

部屋に戻ると、八雲さんはまだ作業があるとかで、自分の部屋に閉じこもってしまっ
た。

私はなんとなく手持ちぶさたで、窓の外の月を眺めている。

（……私はもう、現代に帰れないの？）

もう日比谷公園に行ってもチャーリーさんには会えないような気がした。

きつとチャーリーさんは現代に帰って、またどこかのお祭り会場で未完成なマジックを披露したりするんだろう。

でも意外と何カ月後……、いや、何年後かに明治時代にやって来て。

『久しぶり、芽衣ちゃん！』なんて言いながら、薔薇の花束でも渡されるのかもしれない。

（許しちゃうんだろうな……私）

置いてけぼりにされて悲しかったけど、たぶんそれは、私が望んだことだから。

だからきつと、さんざん文句を言うだけ言って、なんだかんだで許してしまうような気もした。

（でも寂しいよ、チャーリーさん）

私はまだ、この世界で生きていく、なんの準備もしていないのに。

「……ちよつとよろしいですか？」

その時、ノックの音とともに八雲さんの声がした。ドアを開け、八雲さんを部屋の中に迎え入れる。

（……あれ？）

八雲さんが、どこか浮かないような顔をしているように見えた。さっき下で藤田さんと会ってから、機嫌があまりよろしくないのはわかっていたけれども。

「どうしたんですか？」

「いえ、実は……貴女にこれを見せるかどうか、迷ったのですが……」

八雲さんはためらいがちに、スクラップブックに貼った古い新聞記事を私に見せた。
「？」

ただでさえ解読困難なほどに変色したその記事は英語で書かれていて、私ではどうが
んばってもお手上げ状態だ。

「これ、なんて書いてあるんですか？」

「lovers' double suicide……つまり心中事件を取り扱った記事です。大富豪の娘サンが使
用人と恋に落ち、身分違いの恋の果てに身投げして命を絶ったそうです。1850年に
発行されたスコットランドの地方紙でした」

「……それって」

（まさか）

私は八雲さんを見上げた。続く言葉を待っていると、

「キャサリン・ドラモンド。これがミス・キャシーの本名のようにですね。さすがに新聞記
事の劣化が激しいので、これ以上は解読できないのですが」

「……………」

心中事件、という言葉がズンと胸に來た。

かなり昔の事件だし、今になって私が彼女たちの死を嘆くのもおかしい話だけれども。

「……八雲さん、この記事どうやって手に入れたんですか？」

「まずこのホテルに家具を輸出した業者を調べたのです。この鏡台を仕入れた際の記録も残っているはずだと見ていましたので」

（そんなことまでしてくれてたんだ……）

「記録さえ残っていれば、家具の売り主は一目瞭然ですからね。すぐにドラモンド家につながりました。……こんな記事までオマケについてくることになってしまいました」

八雲さんは私をソファに座らせ、その隣りに腰を下ろした。

「ドラモンド家の皆サンは、きっと娘サンの思い出の形見である鏡台を手元に置いておくのがつらかったのでしょう。そして売り払った鏡台をホテルが買い取り、今この部屋にあるというわけだったのですね」

「……………」

すごい経緯だ。でもこの鏡台に限らず、新品の家具でないならどれもなにかしらのバックストーリーがあるような気もする。

私はたまたま、この鏡台に乗り移っていたキャシーを視てしまったというだけで。

「じゃあ、あののっぺらぼうは……？」

「これは推測の域でしかありませんが……。あののっぺらぼうは彼女を追い求めてこの

ホテルにたどり着き、それ以降、ずっと彼女を探し続けていたのではないのでしょうか」

八雲さんはすでに仮説を立てていたらしく、淀みなく持論を述べた。

「しかしミス・キャシーは部屋から出られず、2人は会えないまま、そうこうしているうちに窃盗事件が発生してしまった、と」

(あ……)

つまりあののっぺらぼうは、なんの悪意もなくただ恋人を探して徘徊していただけなのに、運悪く窃盗の容疑をかけられてしまった。妖邏課にマークされながらも、それでも彼はずっとキャシーのことを探し続けていたんだろう。

(……そういえば、キャシーが自由に歩けるようになったのは、私がこの部屋に住むようになってからなんだよね)

キャシーの身が自由になってからは、彼女自身も無意識のうちにずっと彼のことを探していたのだと思う。……そして今夜、彼と再会したことで、キャシーはすべてを思い出すことができた。

「……キャシーは、成仏できたんですよね」

「ええ。ミス・キャシーの心残りは、おそらくあの手紙だったのでしょうからね」

「貴女にあの手紙の存在を教えた時点で、彼女はすべての悔恨から解放されたのです」

あの手紙の存在を私に教えたことで、キャシーの心残りはなくなった。

これは私の勝手な想像だけど、キャシーが成仏できたことで、ようやくのっぺらぼうの彼も成仏できたんじゃないかな、と思う。

彼と再会したことで、キャシーはすべてを思い出した。

——そして、彼も。

八雲さんは私の手に手を重ね、優しく微笑んだ。

「私は、貴女が彼らを引き合わせたのだと思っています」

「……え？」

「もし魂依である貴女がこの部屋に滞在しなければ、彼らはあと100年も200年もすれ違い続けていたでしょう」

「……どうでしょうか」

私にはよくわからない。

ただキャシーと話しているのが楽しかっただけで、なにか直接力になれたわけでもない。むしろ一番力になってくれたのは、八雲さんだ。

そもそもこの部屋に私を住まわせてくれたのも、八雲さんだった。

（じゃあ……私がこの時代に来たのも、この時代で八雲さんに出会ったのも、なにか意

味のあることだったのかな……?」

いくら私に力があっても、きっと1人ではなにも動かないし、なにも変えることができなかった。

私が八雲さんと出会えたことで、なにかが動いたのだとしたら……。

……そうだったらいいな、と思う。

「八雲さん……ありがとうございます。私……本当になんにもできなくて。せめて英語でもできたら、もっとキャシーのこといろいろわかってあげられたのに。いまさら後悔しても、意味ないですけど……」

すると八雲さんは、私の頭をゆっくりと撫でた。

眼鏡の奥の瞳は、それこそ学校の先生みたいに真面目でおだやかだ。

「ふふ。今のは、いい気づきですね。ではこれから一緒に、ゆっくりと学びましょう。学んだ知識は必ず貴女の助けになりますから」

「……英語、教えてくれるんですか?」

「貴女は私をなんだと思っているのです。帝大の英文科講師ですよ?」

彼は眼鏡のフレームを指で押し上げ、眉をきりりとかたち作る。

「……いいですか? 貴女は今日から、私だけの生徒です。他の誰にも指導などさせませ

んよ。私がすべて教えて差し上げます」

「……ありがとう、ございます」

「ですから……絶対に、藤田サンのところには行かないでくださいね」

「え？」

「……貴女が藤田サンに、魂依として力を貸したいと思うなら、それでもいいのです。ただ、絶対に私のもとからいなくならないと約束してください。私のそばからいなくなると……」

「……………」

「……そう、言ってください。貴女を愛しているのです」

おでこに優しくキスをしてから、八雲さんは息を吐き、私を両腕でしっかりと抱きしめる。

（……どうして、そんなふうに不安に思うんだろう）

私は八雲さんのことが好きで、八雲さんがこの時代にいるからここに残ったのに。

八雲さんがここににいるから、なにかもを手放したのに。

（……なんて、心の中で思ってるだけじゃ伝わらないんだよね）

私は八雲さんを抱きしめ返しながら、思う。

（いつか言えるかな。私がこの時代の人間ではないってことを）

今はまだ言えないけど、いつかきつと伝えたい。私はこの時代に来て八雲さんに出会い、なにかを変えた。

時代の大きな流れの中では、ほんの些細な変化だろうけど、きつとなにかが動いたと思いたい。

「八雲さん。私、どこにも行きません」

「……本当ですか？」

「はい。でも八雲さんが行くところなら、どこにでも一緒に行きたいです。東京でも東京じゃなくても、どこにでも」

八雲さんは私を見つめ、ついばむように小さなキスを繰り返した。

それから深く唇を重ね、甘いため息をこぼす。

「……では、どこか大きな家を借りて一緒に暮らしましょう。このホテルより、もっと見晴らしのいい家を。私はその家で、小説を書きます。ミス・キャシーをモデルにした、悲しくて美しい小説です」

また、キスが唇に降りる。

幸せだな、とぼんやりと思う。

「……私もその小説が読みたいです。どんな題名になるんでしょうね」

「そうですね……。『手紙』という言葉が入るといいでしょう。『失われた』……。いや、『葬られた』……。『葬られた手紙』……」

思案とともにつぶやかれた言葉たちが、心地よく私の耳に流れ込む。

もう私は、月の満ち欠けを指で数えない。

夜空を見上げてため息を漏らさない。

私は八雲さんの隣りで、この時代で時を重ねて――生きていく。

*

「……おかしいですねえ。これだけ熱心に探しているのですから、手がかりくらいはあつてもよさそうなものですが……」

「そ、そうですね……」

きまじめな表情で思案にふける八雲さんを前にさつきから私も考え込んでいた。いったい彼にどう伝えればいいのか、と。

「ああ、通りすがりのその貴女！　つかぬことをお聞きしますが、貴女このあたりで

ヤマタノオロチを見ませんでしたか？」

（うわあ、八雲さんまたやってる）

テンションの高い外国人にいきなり意味不明な質問をされ、とおりすがりの女性は固まってしまった。さつきから、このパターンのくり返しで、なかなか調査は進まない。本人には突飛な質問をしているという意識がまるでないようだった。

（だから、私になんとかアドバイスをしてあげなくちゃいけないんだけど……）

「八雲さん。通りすがりの人にいきなり『ヤマタノオロチ』なんて固有名詞を出されたら、誰だって驚くと思いますよ」

やんわりと伝えてみると、八雲さんは一瞬きよとした顔になった。それから、合点がいったようにポンと手を打つ。

「ああ、失敬。私としたことが……」

（よかった。気づいてくれたみたい）

「ではまず、ヤマタノオロチについて詳しくご説明いたしましょう。これは古事記に登場した伝説の生物でして……」

（いや、そうじゃなくて……）

とおりすがりの女性に対し、熱心に語り出す八雲さんを見て私は諦めのため息をつい

た。

八雲さんは普段からマイペースな人だけど、研究のこととなると暴走気味になる。情熱に目をキラキラさせて、相手の反応もおかまいなしに夢中で話すから、初対面の人に怖がられてしまうこともしばしばだ。

「あつ、レディ！ ちょっと待ってください！ まだ話は終わっていないんですよ。……ふう。また逃げられてしまいました」

もう何度目になるのかもわからない失敗にもめげる様子を見せず、ただ怪訝そうに小首を傾げている。

「私は真面目にフィールドワークを続けているだけだというのに、なぜ皆さん協力してくださらないのでしょうか。東京の人は冷たいと思いませんか？ 芽衣サン」

「うーん……どうでしょう。普通は逃げると思いますが……」

「なぜです？ 私はただ、東京府内で最近出沒すると噂のヤマタノオロチについて調査しているだけなのですが……」

「なんていうか、新興宗教の勧誘っぽいというか……」

「は？ それはどういうことでしょうか？」

ますます意味がわからないといった様子できょとんとしている八雲さんに、どうやっ

て説明しようかと考えあぐねていると、

「あっ、その貴女！　つかぬことをおたずねしますが、このあたりでヤマタノオロチを……」

八雲さんは新しいターゲットを見つけたらしい。今度こそはと目をキラキラさせて、手帳とペンを手に通行人に詰め寄っている。

夢中になって話す横顔は、鹿鳴館で出会った頃からちっとも変わっていない。

たしかあの時も――。

「――おい」

……そう。あの日の夜会でも、八雲さんは初対面の私にひたすら物の怪話を語っていた。

ひたすらしゃべり続ける八雲さんに呆気にとられていたら、たしか藤田さんが――

「おい、娘」

「って、藤田さん！？」

私はあんぐりと口を開けて、目の前に現れた藤田さんを見上げた。思い出に浸ってぼんやりしていたら、そこにまさかの張本人が現れたからだ。

「おや？　藤田サンではありませんか！　どうしてこんなところに？」

藤田さんの鋭い視線などものともせず、八雲さんは表情をほころばせる。

「怪しい外国人が通行人に絡んでいるとの通報があったのだが、貴様のことか」

「いいえ？ 人違いでしょう」

「ふん。やはり貴様のことだな」

藤田さんはあつさりと断定した。

「路上での迷惑行為は今すぐやめろ。やめないと引っ捕らえるぞ」

「迷惑行為だなんて失礼な言いぐさですね。私はただ日本研究家として、伝説の生物についてフィールドワークを行っていただけです。なにか問題でも？」

「問題があるから通報されているんだろうが」

「……おい、娘。ぼんやりとしていないでおまえも止めろ」

固唾を飲んでふたりのやりとりを見守っていたところに、急にお鉢が回ってきて慌ててしまう。

「ごもつともです。面目ありませ……」

「おおっと！ 私の許嫁になにか用ですか、藤田サン」

今さっきまでのほほんとしていた八雲さんの口調に、好戦的な響きが滲む。

「……ああ、さては帝國ホテルから私たちがいなくなってしまうって、藤田サンも寂しい

のではありませんか？ 最近この近くにかまえた私たちのスイートホームに遊びに来た
いのでしょうか！ だったらそうと最初から言ってくだされば……」

「ふざけるな。貴様こそ、その娘を連れてとつと国に帰れ」

「なにをおっしゃいます、私はもう日本に骨を埋めると決めたのですよ」

そう反論すると、八雲さんはふわつと優しく微笑んだ。

「私は日本人以上に……この国を愛しているのですからね」

「……ふん。奇恃なことだ」

藤田さんはあきれかえったように肩の力を抜くと、くるりと身を翻して去っていく。

……その去り際の横顔がいつもよりやわらかく見えたのは、私の気のせいということ
にしておこう。

「……いい風ですねえ。この家は高台にあるせい、実に気持ちのいい風がとおり抜け
ます」

午後の光が射す和室で一緒にくつろいでいた八雲さんが、ふと声を弾ませた。

「はい、本当に」

「この家は、庭が少々狭いのは残念ですが縁側からのぞむ景色も素晴らしい。家の隣に
はいい感じに裏寂れたお寺もあることですし、ここに引っ越してきてよかったと……今

はしみじみ思います」

「私も、この家が好きです」

日本家屋が大好きな八雲さんがこだわり抜いて選んだだけあって、すっきりした造りのこの家は、とても居心地が良い。

今日みたいに関んなことが起こった日も、外からこの家の玄関が見えてくると、『帰ってきた』と実感してほっとできる。

「……そうですか。貴女にも気に入っていただけたことがなにより嬉しいです。しかし、しみじみと思いますが……、貴女も酔狂な方ですねえ」

「な、なにがです？」

「貴女はなぜ、しがない英語講師であるこの私と、一緒になることを決意してくださったのでしょうか」

唐突にそんなことを聞かれても、困ってしまう。

（だいたい、身元も知れない私を選んでくれた八雲さんに『酔狂』だなんて言われてもなあ……）

「もしかすると、それが私の人生において最大の謎かもしれません」

「私も謎です」

「それは困りましたね……これでは謎を解きようがない」

八雲さんはしばし考えたあと、お手上げというようにふうっと吐息をついてから私を見つめた。

「でも……まあ、いいでしょう。貴女にとっては動機が謎でも、私の動機ははっきりしていますから」

色の違う左右の瞳が、眼鏡の奥であやしげな光を放ったかと思うと――。

腕を引かれてバランスを崩した私は、あぐらをかいていた八雲さんの膝の上に転がり込み……。

背中からすっぽりと抱きかかえられていた。

「八雲、さん？」

反射的に彼の顔を見上げたものの、思いのほか近い距離だったことに驚いて、即座にうつむいてしまう。そんな私を逃がさないとしても言いたげに、彼の唇はすぐさま耳元に寄ってきた。

「私の動機は……、貴女を愛している。ただそれだけです。まあ、自白するまでもなく、貴女はとつくにお見とおしかと思います」

八雲さんの恥ずかしい台詞は聞き慣れたつもりだったが、それでもすぐに顔が熱く

なった。

「ふふっ……そうやって、すぐに耳が赤くなる」

「っ……」

耳朶に、音を立ててキスを落される。それどころか、力なく身をよじる私をからかうように息を吹きかけたりと、もう好き放題だ。

「……ふふ。こんなに反応が素直だと嬉しくなります。もっともっと、いろんな反応を見してみたくなる……」

（うう……完全に遊ばれてる）

耳どころか、顔から首まで全身真っ赤に違いない。

「……おや？ 気のせいでしょうか。貴女の唇が、口づけを求めているように見えるのですが……」

「き、気のせいです」

「いいえ気のせいではないでしょう。それを証拠に、貴女の顎がほんの少しだけ上がっている」

（そ、そんな……）

「ふふ、お行儀がよくてよろしいですね」

人の気も知らないで、八雲さんは満足げに頷いた。

「ではそんな貴女に、キスをして差し上げましょう。ただし、私のキスはあまりお行儀がよろしくないかもしれません……」

こんなふうに艶を帯びた八雲さんの声は、普段の紳士ぶりとは別人のように響いて聞こえる。私がどんなに恥ずかしがっても、この声は絶対に許してくれることがない。

「さあ、私のかわいい花嫁サン。こっちを向いて。目を閉じて……」

「ん……」

「っ……!」

八雲さんの『お行儀のよろしくないキス』という表現は、控えめすぎたかもしれない。研究者らしい熱心さで、強く強く、奪っていく。

「……っ、八雲さ……」

「おやおや、誰が1度だけと言ったんです?」

からかうような声音とは裏腹に、八雲さんの瞳はいまだ隠しようのない熱をたたえていた。

「あともう少し……あの太陽が沈むまで……この口づけを、受け取ってくださいね」
私は観念して、力を抜いた。

（思えば、出会った時からずーっと八雲さんのペースに巻き込まれっぱなしだったな…）

子供みたいに純粹で、好奇心が旺盛で、とんでもなくマイペースだけど、とびきり優しいジェントルマン。

「貴女をずっと、愛していますよ……」

（私です。八雲さん）

愛しく思うその気持ちを、キスに変えて、八雲さんに返す。

やがて静かな夕暮れの気配が部屋に忍び、私たちを包んでいった――。

） F I N （